

第3回江戸川区消防団運営委員会

令和7年2月27日（木）11時00分
江戸川区役所東棟5階 災害対策本部室

次第

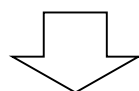
- 1 開 会
- 2 委員長挨拶
- 3 審議予定（案）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料 1
- 4 審 議 事 項
- (1) 諮問について
「変化する社会情勢に適応し特別区消防団の組織力を向上させ住民の負託
に応え続ける方策はいかにあるべきか」
- (2) 答申（案）について
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料 2
- 5 閉 会

江戸川区消防団運営委員会 審議予定(案)

諮問事項	「変化する社会情勢に適応し特別区消防団の組織力を向上させ住民の負託に応え続ける方策はいかにあるべきか」
------	---

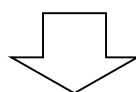
※審議期間：諮問日から令和7年3月末日まで

第1回 運営委員会 令和6年3月22日	○前回諮問の答申報告 ○今回諮問事項の趣旨説明・大項目の抽出
------------------------	-----------------------------------

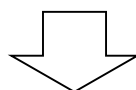


※ 各消防団へアンケート実施

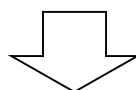
第2回 運営委員会 令和6年10月22日	○答申骨子(中・小項目)の抽出・検討
-------------------------	--------------------



事務局	審議内容を踏まえて答申案を作成
-----	-----------------



第3回 運営委員会 令和7年2月27日	○ 答申案の検討・承認(答申決定)
------------------------	-------------------



令和7年3月31日までに答申

(案)

江戸川区消防団運営委員会答申書

江戸川区消防団運営委員会

第1 諮問事項	1 頁
第2 諮問の趣旨	1 頁
第3 課題	1 頁
第4 検討事項及び方向性	1 頁～2 頁
第5 検討結果及び方策について	2 頁～7 頁
第6 まとめ	7 頁

第1 諮問事項

「変化する社会情勢に適応し特別区消防団の組織力を向上させ住民の負託に応え続ける方策は
いかにあるべきか」

第2 諮問の趣旨

特別区消防団は地域になくてはならない代替性のない存在であり、地域防災力の中核として、住民の負託に応えてきたところです。

さらに、本年(令和5年)は、関東大震災から100年の節目の年であるなど、消防団への期待は更に高まっており、東京の安全安心を守っていくためには地域防災力の中核を担う消防団が、将来にわたって更に充実し、消防団としての役割を果たしていく必要があります。一方で、特別区においては、人口が2035年ごろに減少に転じ、2050年をピークに高齢化が進行すると予測されているほか、近年は、DXの進展によるテレワークなどの働き方の多様化や、単身世帯の特別増加による地域コミュニティの希薄化など、社会情勢は常に変化しているところです。

このことから、各消防団や各区の特性なども踏まえながら、変化する社会情勢に適応し特別区消防団の組織力を向上させ、住民の負託に応え続ける方策について諮問するものです。

第3 課題

諮問における現状の課題は次のとおりである。

- 1 地域防災の要である消防団として、変化及び成長していくことが重要である。
- 2 活動力を地域で発揮していくことで、地域住民の負託に応え続けることが重要である。

第4 検討事項及び方向性

- 1 入団し活動を継続したいと思える組織の活性化方策について、江戸川区の地域特性や消防団の現況(構成等)を踏まえ検討する。
 - (1) 団活動によりやりがいを持てる方策の検討
 - ア やりがいを感じる活動や各世代等でやりがいに違いがあるかなどを検討
 - イ 検討結果に基づき、やりがいを持てる方策内容を検討
 - (2) 資格取得講座の拡充等の検討
 - ア 既存講座の拡充や消防団活動において必要な資格等について検討
 - イ 多様な職業等からなる消防団の特性を活かした団員から団員への講話や研修の検討
 - (3) 多様な主体との協働による地域密着型の各種講習や教養講座の検討
各地域に根付いている企業や官公庁、消防団協力事業所等と連携した講習や講座、ワークショップの発掘
- 2 最新の技術等を考慮した活動環境の改善方策について検討する。
 - (1) 災害への出場命令や、団員間の情報伝達のあり方の検討
 - (2) 消防団事務の効率化が可能なタブレットを活用したシステムの検討

- 現行整備されているタブレット端末の更新に合わせた新たなアプリやシステムの導入など
- (3) 各種資機材の更新に合わせた仕様変更等の検討

環境に配慮した装備資機材の検討や仕様変更による利便性の向上、負担軽減

3 消防力維持のため、計画的な人材育成方策について検討する。

- (1) 経験が浅い消防団員への教育訓練体制や目標、内容の検討
- (2) 経験豊富な団員(中核となる団員)による訓練指導体制等の検討
- (3) 操法訓練と実動訓練の実施の目安などの検討
- (4) 訓練効果の確認方策について検討

4 地域に尽力している消防団を地域住民により知ってもらう方策について検討する。

- (1) 積極的な災害活動の定着化と区等と連携した普及方法の検討
- (2) 地域から、より理解と信頼を得る消防団づくりの検討

第5 検討結果及び方策について

江戸川区内3団の現役団員に実施したアンケート結果（「江戸川区消防団運営委員会の諮問事項に対する意向調査」別添え1、以下「意向調査」という。）及び江戸川区の特性を踏まえて検討した結果（別添え2「江戸川区消防団の地域特性」参照）と、それを踏まえた今後の方策は以下のとおりです。

1 入団し活動を継続したいと思える組織の活性化方策について、江戸川区の地域特性や消防団の現況(構成等)を踏まえ検討する。

- (1) 団活動によりやりがいを持てる方策の検討（「意向調査」Q1～4参照）

ア 消防団活動の中で「やりがいを感じる活動」について、「意向調査」において「災害活動」（1位、21%）「消防警戒」（2位、19%）、さらに、「やりがいを感じる瞬間」について、「災害現場で感謝された時」、「消防警戒で地域の安全を守っている時」「消防警戒で感謝された時」が多数であった。こうしたやりがいを感じる機会を増やすこと、地域貢献している実感を得られることが、消防団員としてのやりがいに直結すると考えられる。

イ やりがいを感じる活動や瞬間には、年代や性別、また階級によっても違いがある。

「やりがいを感じる活動」について、最も顕著な違いは、女性の57%が「救命講習指導」を挙げているが、男性はその半分以下となっている。女性は災害活動や警戒よりも、相手方と直接触れ合うことのできる講習指導等にやりがいを多く感じていると推察できる。

「やりがいを感じる瞬間」について最も顕著なのは、副分団長以上は、55%に上る団員が「操法大会等で仲間と団結し訓練している時」を挙げている一方、部長以下ではわずか4%にとどまっている。ここから、訓練等においてリーダーシップを発揮している副分団長以上がその訓練におけるやりがいを最も感じていると推察できる。

こうしたそれぞれの年代・性別・階級による消防団活動に対するやりがいの違いを念頭において、各団員が活躍できる場を提供することが重要である。

ウ 消防団活動を長く続けられる方策の検討

「意向調査」では「消防団員をやめようと思った事がある」と答えた団員が全体においての39%であり、「ある」理由については「本業への支障」が最も多く、次いで、「団行事が多く私生活に負担」、「家族に迷惑がかかった」となっている。

消防団活動と本業、私生活、家庭との両立を支援するため、各種行事における団員の係員指定の人数を適正にする（いたずらに多くの団員を動員しない）、できる限り早期に予定を明示し、スケジュール調整しやすくするといった配慮をし、さらに、団全体で「無理のない消防団活動」を各団員が他に遠慮することなく実践できる環境作りをすることが重要である。

エ 消防団員を長く続けるために必要なものとして、「家族の理解」であるとの回答が、27%と最も多いことから、家族イベントの開催や、消防団活動への理解を深めるための情報提供など、家族が快く消防団活動について応援できる環境づくりに配慮が必要である。

オ また、消防団を長く続けるために「団員間のコミュニケーション」との回答も多いことから、各分団のチームワークの醸成を促進する行事（操法訓練に限らず、分団対抗の競技大会等娯楽要素の高いイベントの開催等）の実施、学生団員、若手団員、女性団員、各階級別といったカテゴリーごとのコミュニケーションの機会（女性団員研修、学生団員研修、若手団員訓練、懇親会等）を増やすことも有益である。

㊦ 資格取得講座の拡充等の検討（「意向調査」Q5～10、別添え3「消防団の主な教育訓練」参照）

ア 「意向調査」の結果から、「警防科研修」、「機関科研修」、「初級幹部科研修」など災害活動に関する研修への関心が高く、資格取得にも意欲的である。

また、「消防団員として不安に思っていること」の一番多い意見としては「大規模災害時の活動」が挙げられており、この点からも災害活動研修といった災害現場での対応に関する研修の受講を要望する団員が多いと考えられる。

一方で、既存の学校研修等の募集人員は毎年各団1名ずつと、非常に限られているために、希望がかなわない状況が見受けられることから、災害活動に関連する研修の募集人員を拡大し、より多くの団員が受講できるようにすることが急務である。これにより、「資格を取得できる」ことにやりがいを感じている団員の満足度を向上させることが期待できる。

また、女性団員研修への関心も高く、女性団員が活躍するための知識・技術を身に付けられるような研修を増設することを検討すべきである。具体的には、女性団員が不安に感じている災害出動や大規模災害時の活動に対して女性団員を特に対象とした研修等である。

イ 「応急手当指導員講習」や「可搬消防ポンプ等整備資格者講習」など、より専門性の高い技術を身につけるための講習も「今後行ってみたい講習」として要望が多く、こうした要望に速やかに応えられる研修体制の整備が望まれる。

また、「防災士」「危険物取扱者」「消防設備士」といった公的資格が必要と考える団員も多いことから、各種資格取得を目的とした講習を多数開催し、資格取得に対する助成制度を整備（江戸川区との連携も検討）するなどにより、消防団員のスキルアップを図りモチベーションを向上させることができる。

- (2) 多様な主体との協働による地域密着型の各種講習や教養講座の検討（「意向調査」Q8 参照）

ア 地域に根差した消防団を実践するためには地域企業や官公庁、消防団協力事業所とのあらゆる形での連携を密にすることが重要であり、その一環として消防団員向けの専門的な講習や教養講座をそうした多様な主体に依頼していくことも有益である。意向調査においても、健康セミナーや手話、英会話の講習を希望する回答も多く、こうした講習であれば、地域の事業者にも依頼することも可能であると考えられる。こうした講習により、消防団員の専門性を高め、活動の質を向上させ、一方では、防災の担い手としての消防団を相手方に認識してもらうこととなり、地域との絆を深めることができる。

相手方に一方的に講習や教養講座を依頼するのではなく、防災訓練や、応急救護訓練を共催すれば、互いに利益を享受することができ、地域の防災力の向上も期待できる。

イ 特に、都内で最もインド人が多く居住し、外国人居住者が多い江戸川区においては、SDGS推進部が昨年開設した多文化共生センターといった区の関係部署との連携をはじめ、管内外国語学校や、インターナショナルスクールとの防災教育、外国語講座等の開催が多文化共生社会における消防団の役割を強化し、外国人居住者とのコミュニケーションの円滑化に非常に有益であると考ええる。

- 2 最新の技術等を考慮した活動環境の改善方策について検討する。

- (1) 災害への出場命令や、団員間の情報伝達のあり方の検討（「意向調査」Q11 参照）

電話連絡や緊急伝達システムに代わる方法として、「意向調査」の結果では、「携帯電話と連動した通信システムの開発」（61%）が最も求められているという結果であった。

ほぼすべての団員が所有し、日常的に携行している携帯電話と連動した「災害出場指令・団員間の情報伝達システム」が最も有効な連絡ツールである。災害発生時に自動的に出場指令を団員に通知し、団員間の情報共有を可能にし、団員の位置情報や状況を共有することができるといった複合的に活用できるシステムの開発が望まれる。

- (2) 消防団事務の効率化が可能なタブレットを活用したシステムの検討（「意向調査」Q12 参照）

今現在、分団単位で配布されているタブレットを活用して消防団事務の効率化が可能になるシステムとしては、出場報告をタブレットで入力すれば費用弁償の請求事務まで一元的に行えるシステムや、入退団手続き、被服の要求といった事務のシステム化が、団員の負担を大きく軽減できると考える。

- (3) 各種資機材の更新に合わせた仕様変更等の検討（「意向調査」Q13、14、22、別添え4「特別区消防団の装備資器材について」参照）

ア 「新たに配置する資器材について」の「意向調査」の結果から、「ガンタイプノズル」

の要望が最も多く、実に74%にも上る。ガンタイプノズルは、消防隊が現在標準的に使用しているノズルの形状であり、50臭ホースに結合するタイプのノズルである。(別添え5「ガンタイプノズルの概要」参照)

現行の消防団用のノズルはパーフェクトノズル(別添え6「パーフェクトノズルの概要」)であり、このノズルを「管そう」(ホースの先に結合し放水する際に抱える筒状の資器材)に装着し使用しているが、ガンタイプノズルに比較し反動力が後方にかかるため、ホースを保持するのに筋力と持久力が必要である。消防団員の負担軽減のために資器材の軽量化が望まれている中、このガンタイプノズルを一番に取り入れるべき資器材であると考えるが、そのためには50臭ホースの配置も合わせて必要になることから整備にはかなりの予算と期間が必要になると考えられる。また、ガンタイプノズルは、取り扱いがしやすく放水量や放水形状を容易に変えられるが、ノズル圧力及びホースの摩擦損失が大きく、実際の放水量が現行のパーフェクトノズルより少なくなるため大量放水が必要になる震災時には不向きであるといった面もあるため、採用には慎重になる必要がある。(別添え7「消防用ホースの比較」参照)

イ また「配置資器材の改良・改善」で最も要望が多かったのは「手引き台車の電動化」である。

現在、電動の手引きポンプ台車は存在しないが、電動化により物理的な負担を大きく軽減することが期待できるため、電動アシスト機能を持つ台車の開発及び導入も進めていく必要がある。(別添え9「電動ホースカーの概要」参照)

ウ 少数意見ではあるものの、下記の消防団員用の防火衣、活動服等の装備が暑いとの声も上がっていることから、昨今の異常な猛暑対策として、熱中症等の受傷を防ぐためにも、通気性及び吸汗性に優れた活動服や冷却材を使用した冷却ベストの導入も進めていく必要がある。

3 消防力維持のため、計画的な人材育成方策について検討する。

(1) 経験が浅い団員への教育訓練体制や目標、内容の検討(「意向調査」Q5～14、15、16参照)。

「意向調査」の結果から、「消防団員として不安に思っていること」の中に、大規模災害時の活動や災害出動が多く挙げられている。(特に大規模災害時の活動については半数近い47%の団員が不安を感じている。)

また、訓練・研修関係についての意向調査でも多くの項目で、災害に対応する実践的な訓練・研修を挙げていることから、震災、水災訓練、火災対応訓練等、実践的な訓練及び研修が不安の払しょく、消防団の活動力の強化に必要である。

そこで、入団1～2年の団員を対象とした上記の実践的な訓練を、消防学校等で集合形式により実施し、基本的な活動について一定・均一の知識・技術を身に付けることができれば、消防団員としての自信とモチベーションにもつながると考える。

(2) 経験豊富な団員(中核となる団員)による訓練指導体制等の検討(「意向調査」Q18参照)

意向調査の結果から、訓練の指導にあたる団の中核を担う団員に対しての訓練には、消

防署による教養が効果的であるとの意見が多く、消防活動の専門家による実践的な教養が求められている。そこで、消防団員と共に災害活動に臨む、中小隊長からの、消火活動だけでなく、現場指揮要領を含む実践的な訓練指導が効果的であるとする。

また、生業等で取得した資格・経験等が消防団活動において十分活用でき、指導者として適性があると認められる場合は、消防団員としての活動実績（団歴）に関わらず、指導者として従事させるなど、柔軟な昇任制度（補職基準）も検討すべきであるとする。

指導要領については、指導マニュアルの作成・活用も効果的であるとの意見も2番目に多かった（32%）ことから、令和6年3月に消防団課で作成した「特別区消防団火災対応訓練マニュアル」も非常に有効であり、今後の活動に有意義に活用されることが期待できる。

(3) 操法訓練と実動訓練の実施の目安などの検討（「意向調査」Q19 参照）

消防団員の間で操法訓練と実災害に則した訓練のバランスについては意見が分かれている。分団内の指揮・規律・団結力が向上するという意見も41%あるものの、訓練の負担が大きいという意見が46%と最も多く、半数近くに上っている。

そこで、訓練の負担軽減を図りつつ、操法訓練の利点も活かすといった方策が必要である。

ア 操法訓練の利点を活かし、若手団員のコミュニケーションツールとして操法訓練を活用することや、新人教育として活用する、また選抜チームを作り、やりがいをもって訓練に臨ませる、といった形で操法訓練を実施し、訓練の負担軽減を図るためには、全分団から操法大会に参加させている現在の原則の見直しを図ることや、操法訓練が実戦的でないと感じている39歳以下の団員が多いことから、操法大会と実戦的な訓練効果確認を交互に実施するなど、操法大会の実施方法について検討する必要がある。

イ しかしながら、消防団としての災害現場での活動において、操法訓練で培われる礼式や操法が少なからず役立ち、消防団の活動における規律にもつながっている点は看過できないところであり、形を変えて、負担を軽減してでも実施を継続する必要があるとする。

(4) 訓練効果の確認方策について検討（「意向調査」Q17 参照）

「団員の能力・経験を知るための手法」については、「スキルアップシート」の作成が1位（27%）、「試験・効果確認の実施」が2位（22%）という「意向調査」の結果であった。これらを組み合わせることで、団員一人ひとりの能力や経験をより詳細に把握し、個々のニーズに合わせた訓練を提供することが可能となるとともに、「スキルアップシート」を団員自らが見直すことにより、自身の消防団員としての知識・技術の到達度を確認することができ、今後の訓練・研修への参加に対するモチベーションにもつながると考える。

試験・効果確認については、例えば消防団合同点検の実施時に訓練効果の確認を行うといった方法をとれば効率的であり、団点検に参加する意義そのものも向上すると考える。

4 地域に尽力している消防団を地域住民により知ってもらう方策について検討する。

(1) 積極的な災害活動の定着化と区等と連携した普及方法の検討（「意向調査」Q20、21 参照）

ア 積極的な災害活動の定着化

前述の各検討項目における「意向調査」の各結果からも消防団員は、より実践的な訓練、研修及び災害対応を容易にするための資器材の整備の拡充を希望しており、災害現場での人命救助、感謝の機会にやりがいを感じている。

よって、こうした消防団員からの積極的な要望を後押しする訓練支援、研修の実施、資器材の整備、災害現場での消防隊との連携を強化することにより、積極的な災害活動の定着化を図れると考える。

イ 区等と連携した普及方法の検討

消防団活動に有効な広報活動については SNS の活用が有効であるとの回答が、全体の 55%と最も多く人員確保策としても、イメージアップ広報を挙げている団員が、全体の 29%と報酬の値上げに次いで 2 番目に多い。

そこで、区等との連携においても、SNS を活用した広報を活用していくことが有益であると考ええる。

現在、江戸川区は、Facebook、インスタグラム、エックス等を運営しているが、各消防団は一部 SNS を開設しているものの、活用範囲は限られている。そこで、SNS 上での相互連携を密にし、互いのフォロワー数の増加に結び付くような積極的な広報戦略を検討していくことが急務であると考ええる。

特に若者層へのアピールに SNS は有効であり、若手団員の個人の SNS との連携により、さらに広報効果が増大することが期待でき、そうした、情報の伝播が SNS の最大の利点であることから、個人の SNS での投稿を安全に実施できるようにするために「消防団員の SNS 投稿のためのガイドブック」といったものを作成し、若手団員にわかりやすいかたちで、ガイドラインを示し消防団活動の個人投稿を可能にすることも今後の広報活動で効果的であると考ええる。

(2) 地域から、より理解と信頼を得る消防団づくりの検討(別添え 2「江戸川区の消防団の地域特性」参照)

「防災訓練」や「地域や学校での防災思想の普及」など、地域と一体となった活動は、消防団の存在感を示し、地域住民との信頼関係を築く上で有効である。

江戸川区の地域特性として、町会と消防団のつながりが非常に強く、町会配置のポンプ車が各団に多数存在するのは特別区内で江戸川区だけである。町会の防災訓練時には、消防署に指導を依頼するよりも、まず先に、消防団に支援依頼することが常であり、町会と消防団のつながりが密接である。また、消防団は地域のまつりや、イベントにも積極的に協力しており、地域住民から厚い信頼を寄せられている。消防団と町会との親密な繋がりを今後も維持し、さらに強めるために、町会の防災部、女性部、青年会等から消防団に入団するルートを作り、地域に密着した消防団体制を確立できれば地域の防災力もおのずと高まり消防団員の継続的な定数の獲得にもつながる理想的な形である。

第6 まとめ

首都直下地震発生時に想定される最大623件もの同時に発生する火災に備え、消防団は単独でも主体的に災害活動ができる力を向上させていく必要がある。そのためには、消防団員の充足率の向上や人材育成により、消防団の組織力を高め、地域住民と力を合わせて災害発生時の被害の軽減を図っていくことが重要となる。

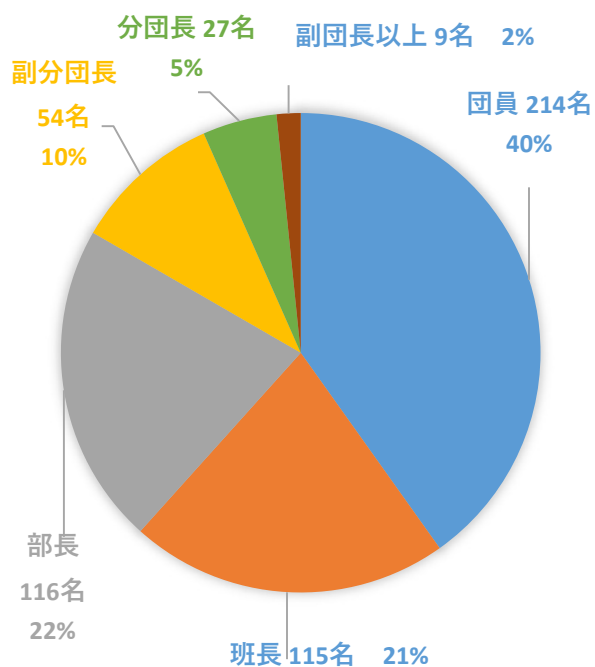
また、「意識調査」では、生業を持つ消防団員にとって、これ以上の活動時間の増加は困難という現実的な問題も垣間見えた。このため、団員の活動時間の総量を増やすことなく、災害や消防団に期待する役割により特化した分野に活動コストを集中するなど、活動内容の選択と集中について、本格的に議論する段階にあると考えられ、少なくとも、本答申に基づき新たな仕組みを導入する等の各種施策が講じられる場合は、それに見合う 既存事業の廃止や合理化をセットにすることが前提になる。

江戸川区消防団運営委員会としては、今後も定期的に団員の意見を取りまとめ、日々変化する社会情勢に柔軟にかつ迅速に適応していくとともに、魅力ある消防団活動を展開することによって、住民の負託に応え続けていく方策が必要であると提言する。

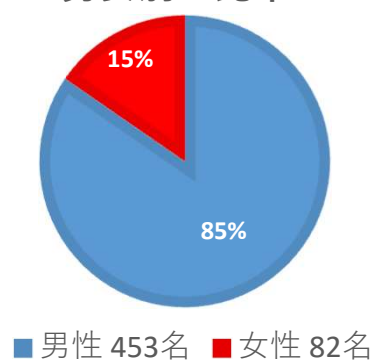
江戸川区消防団運営委員会の諮問事項に対する意向調査

調査回答者 総数 535名						
階級	団員	班長	部長	副分団長	分団長	副団長以上
人数	214名	115名	116名	54名	27名	9名
比率	40%	21%	22%	10%	5%	2%
	83%			17%		
年齢	18歳～	20歳～	30歳～	40歳～	50歳～	60歳以上
比率	2%	9%	8%	19%	35%	27%
人数	11名	48名	42名	102名	186名	146名
比率	101名			434名		
	19%			81%		
性別	男性			女性		
人数	453名			82名		
比率	85%			15%		

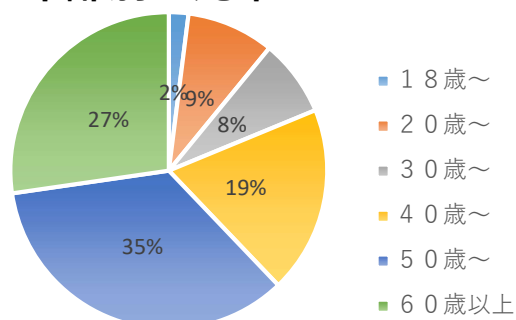
階級別 比率



男女別 比率

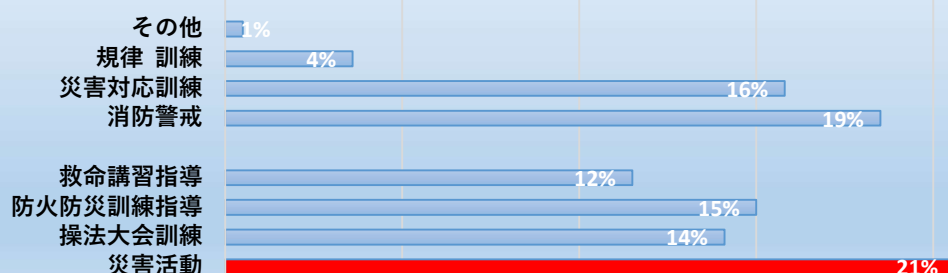


年齢別 比率



Q 1 消防団活動の中で、やりがいを感じる活動について

100%回答



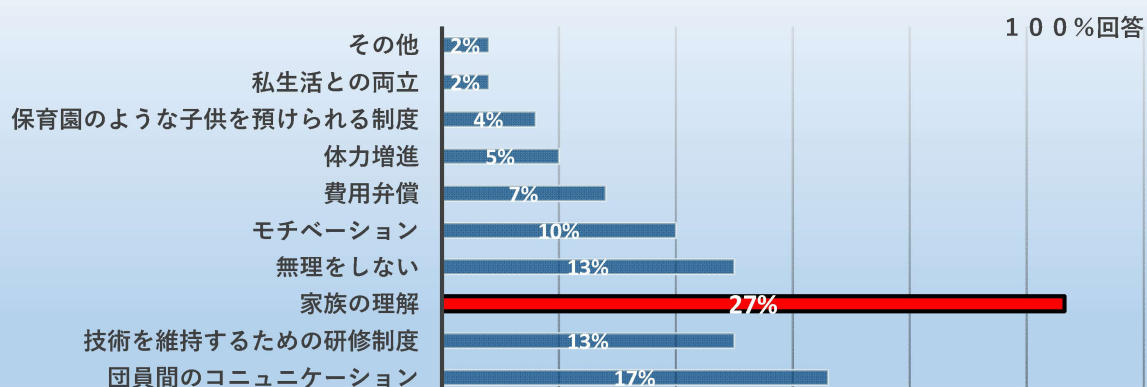
Q 1 消防団活動の中で、やりがいを感じる活動について (複数回答可) 100%回答

		災害活動	操法大会訓練	防火防災訓練指導	救命講習指導	消防警戒	災害対応訓練	規律訓練	その他
団員全体		21%	14%	15%	12%	19%	16%	4%	1%
内 訳									
階級別	副分団長以上	69%	43%	44%	36%	40%	54%	14%	3%
	部長以下	47%	33%	34%	27%	47%	35%	8%	1%
性別	男性	53%	35%	36%	23%	46%	39%	10%	0%
	女性	37%	34%	41%	57%	39%	34%	7%	0%
年齢	40才以上	52%	34%	38%	28%	46%	42%	11%	0%
	39才以下	43%	36%	31%	29%	43%	23%	6%	0%

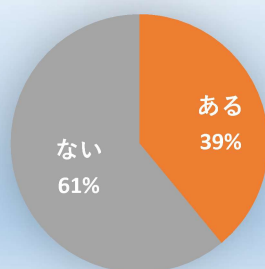
Q 2 消防団活動の中で、やりがいを感じる瞬間 (複数回答可) 100%回答

質問事項	団員全体	階級別		性別		年齢	
		副分団長以上	部長以下	男性	女性	40才以上	39才以下
災害現場で人命を救助できた時	8%	17%	17%	13%	37%	16%	22%
災害現場で感謝された時	14%	40%	26%	30%	23%	31%	20%
操法大会等で仲間と団結し訓練している時	6%	55%	4%	8%	43%	9%	31%
操法大会等で表彰された時	6%	23%	14%	16%	12%	16%	14%
訓練指導で参加者が技術を身に付けられた時	7%	41%	11%	16%	20%	17%	14%
訓練指導で感謝された時	7%	29%	12%	15%	15%	14%	19%
消防警戒で地域の安全を守っている時	16%	55%	28%	31%	38%	31%	37%
消防警戒で感謝された時	15%	38%	29%	33%	20%	32%	22%
各種訓練で知識や技術が身についたと実感	18%	39%	37%	35%	46%	39%	30%
その他	3%	0%	3%	2%	2%	2%	4%

Q 3 消防団員を長く続けるために何が必要か？



Q 4 消防団員をやめようと思った事があるか？



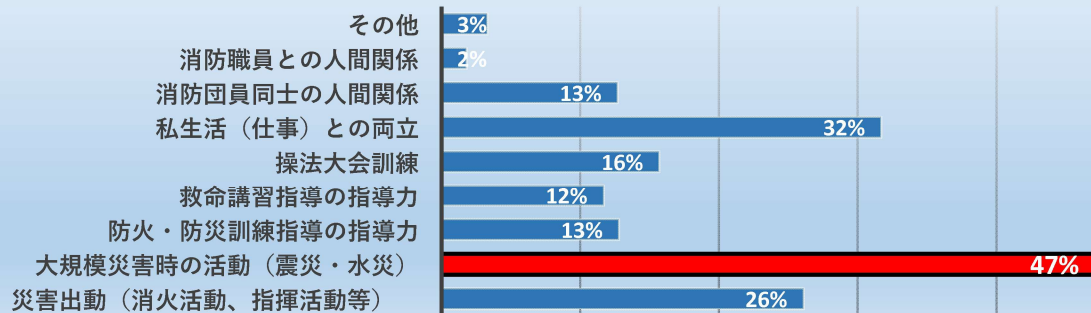
Q 4 消防団員をやめようと思った事があるか？

100%回答

	団員全体	階級別		性別		年齢	
		副分 団長 以上	部長 以下	男性	女性	4 0 才 以上	3 9 才 以下
ある	39%	59%	41%	40%	35%	43%	24%
ない	61%	41%	59%	60%	65%	57%	76%
『ある』理由							
本業に支障		17%	11%	12%	9%	12%	9%
団行事が多く私生活に負担		18%	9%	4%	7%	11%	6%
家族に迷惑がかかった		8%	3%	11%	4%	4%	3%
人間関係		3%	5%	4%	6%	6%	1%
体力が不安		2%	2%	2%	4%	3%	0%
家庭の事情		2%	2%	2%	2%	2%	1%
その他		9%	4%	6%	0%	5%	4%

Q 5 消防団員として不安に思っていること

(複数回答可) 100%回答

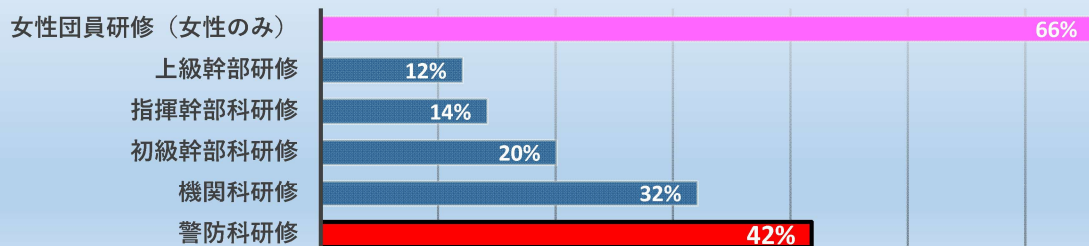


Q 5 消防団員として不安に思っていること (複数回答可) 100%回答

	団員全体	階級別		性別		年齢	
		町長 団長 以下	部長 以下	男性	女性	40才 以上	39才 以下
災害出動（消火活動、指揮活動等）	26%	22%	27%	26%	28%	26%	29%
大規模災害時の活動（震災・水災）	47%	48%	47%	46%	54%	49%	39%
防火・防災訓練指導の指導力	13%	11%	13%	13%	12%	14%	10%
救命講習指導の指導力	12%	9%	12%	12%	11%	12%	11%
操法大会訓練	16%	22%	14%	35%	10%	17%	12%
私生活（仕事）との両立	32%	38%	31%	35%	15%	32%	33%
消防団員同士の人間関係	13%	11%	13%	13%	10%	13%	10%
消防職員との人間関係	2%	1%	2%	2%	2%	2%	3%
その他	3%	4%	3%	3%	5%	3%	5%

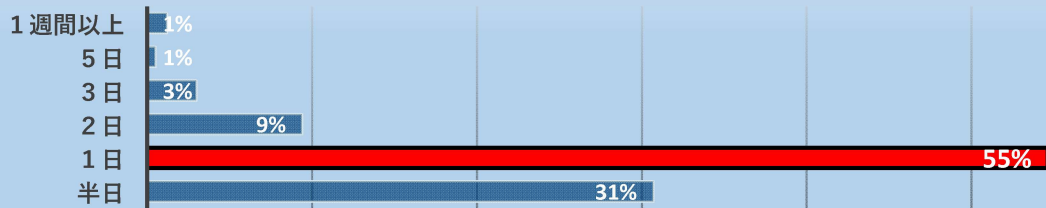
Q 6 今後、行ってみたいと思う学校研修 (複数回答可)

100%回答



Q 7 研修・講習の参加可能期間

68%回答

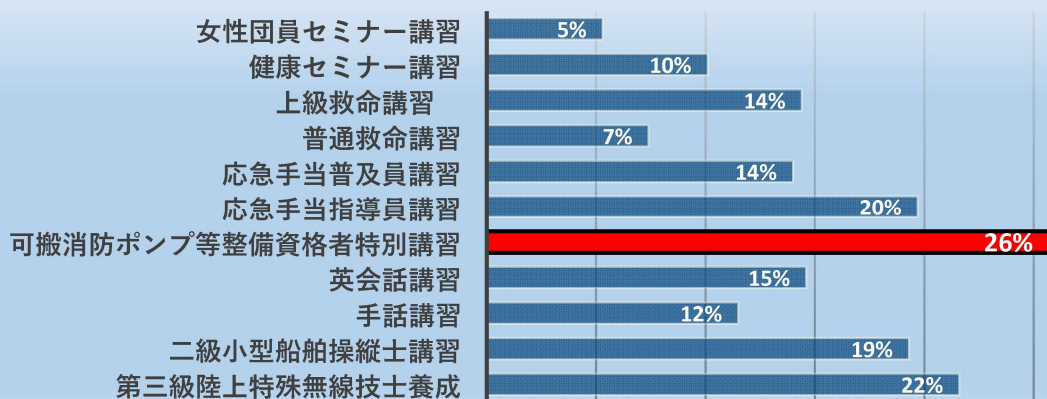


必要な条件	13%回答
土日祝に参加したい	42%
1ヶ月以上前に知りたい	15%
2ヶ月以上前に知りたい	18%
3ヶ月以上前に知りたい	13%
その他	12%

Q 8 今後、行ってみたいと思う講習

(複数回答可)

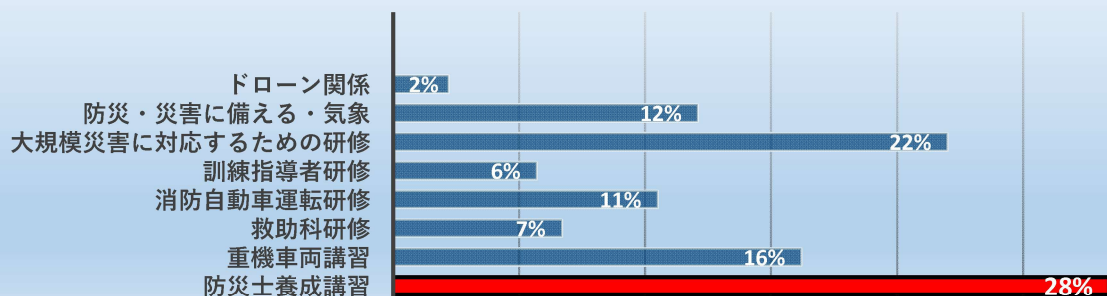
91%回答



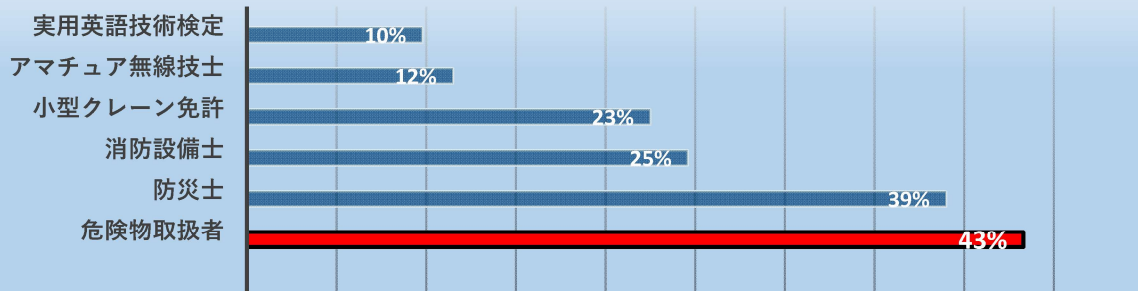
Q 9 必要な講習・研修・ワークショップ

(複数回答可) 5

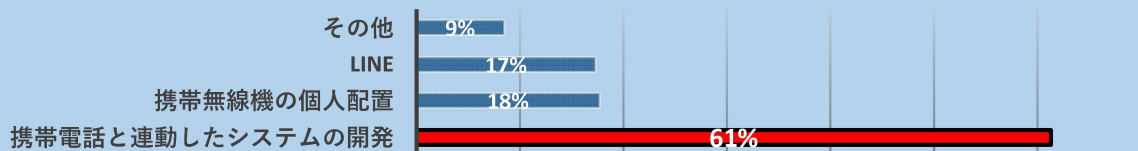
9%回答



Q10 今後、必要と思われる資格 (複数回答可) 87%回答



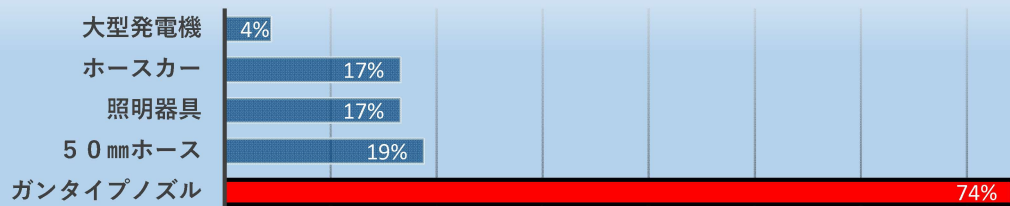
Q11 災害出場命令、団員間の情報伝達等の効率化を図れる通信システム (複数回答可) 53%回答



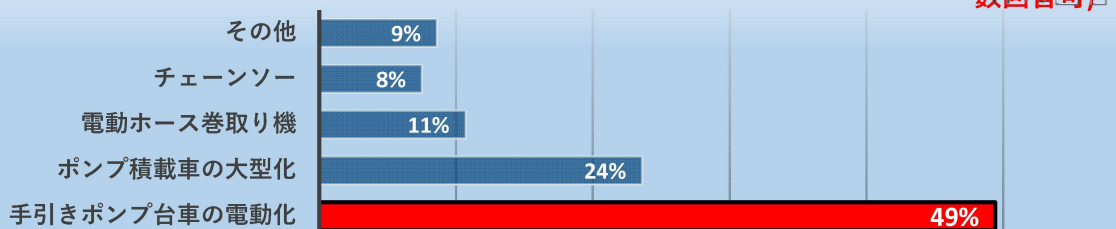
Q12 配置タブレット端末に新しいアプリ、システム等を導入するなら 43%回答

災害連絡アプリ	77%
団員各自の位置がわかるアプリ	20%

Q13 新たに配置して欲しい資機材 (複数回答可) 17%回答



Q14 配置資機材で改良・改善してほしいもの (複数回答可)



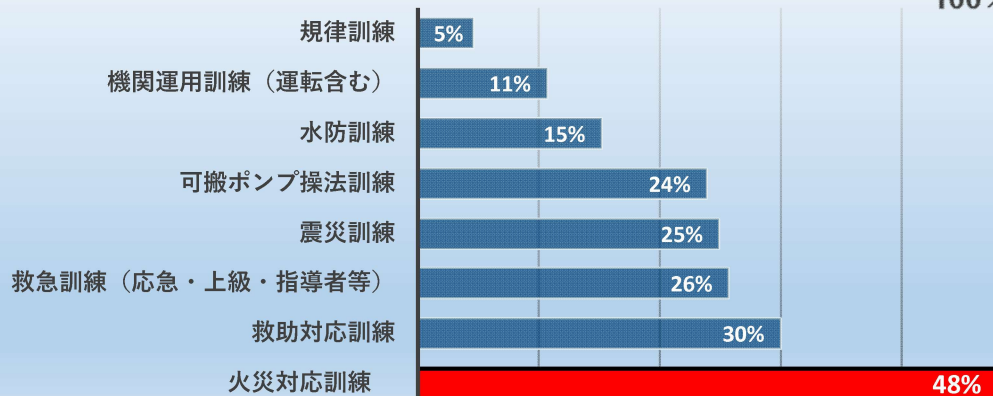
Q15 消防団活動で、やりがい向上できる最も効果的なもの (複数回答可) 100%回答

	団員全体	階級別		性別		年齢	
		副分団長以上	部長以下	男性	女性	40才以上	39才以下
自身の知識や技術を向上する	49%	19%	55%	48%	55%	43%	50%
地域の方と触れ合う機会を多く持つ	49%	20%	54%	47%	56%	37%	52%
団員同士の団結を感じる	35%	14%	39%	35%	33%	30%	36%
災害活動に数多く出る	29%	14%	32%	29%	26%	38%	27%
日頃の活動を認められる	27%	12%	30%	27%	24%	25%	27%
団の中で意見を言ったり活かしたりできる	14%	8%	16%	14%	16%	5%	16%
競技会などに挑戦する	8%	3%	9%	8%	10%	11%	7%
階級を上げる	5%	2%	5%	4%	11%	4%	7%

Q16 消防団の訓練で最も必要と思われる訓練 (複数回答可)

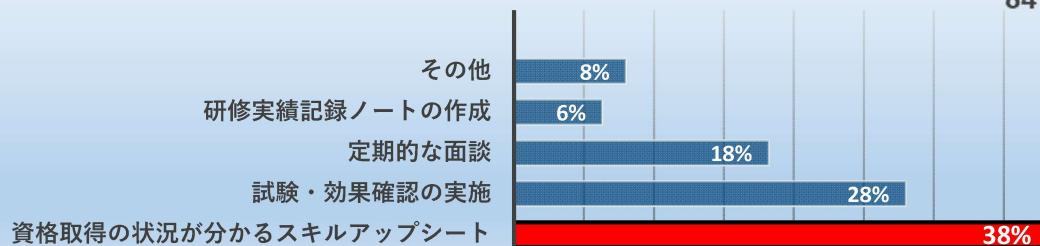
(複数回答可)

100%回答



Q17 自分の能力、経験を知るために効果的なもの

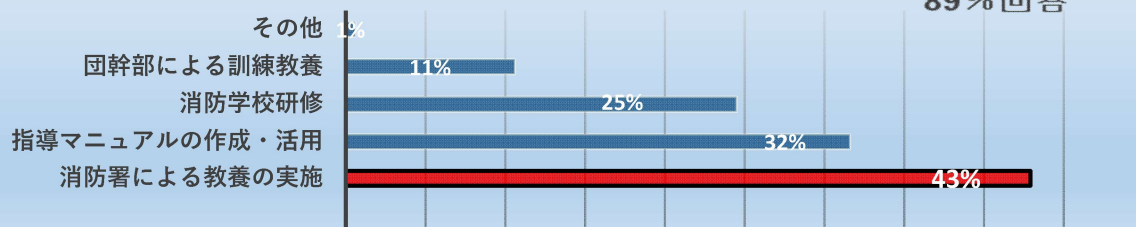
84%回答



Q 18 経験豊富な団員（中核となる団員）による分団内の訓練体制を強化するため、訓練指導にあたる団員の育成に効果的なもの

(複数回答可)

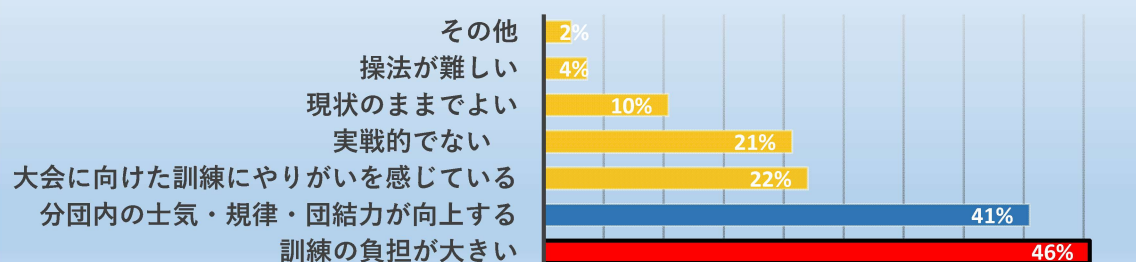
89% 回答



Q 19 ポンプ操法大会について、どのように感じているか

(複数回答可)

97% 回答

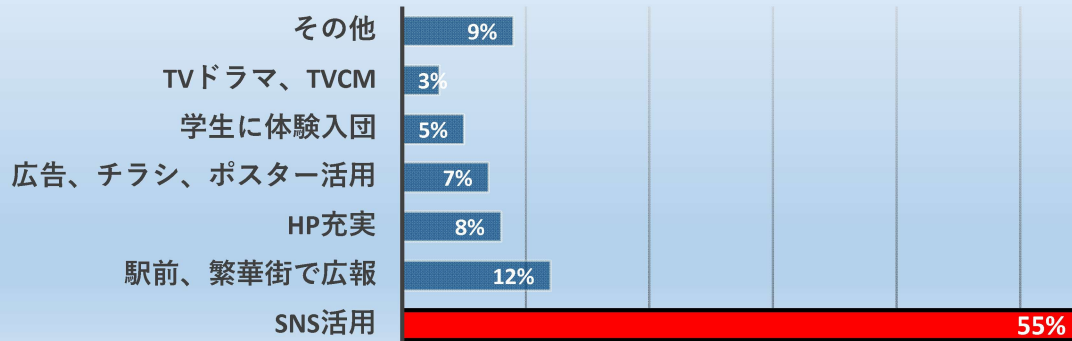


Q19 ポンプ操法大会について、どのように感じているか 複数回答可 97% 回答

	団員全体	階級別		性別		年齢	
		副分団長以上	部長以下	男性	女性	40才以上	39才以下
訓練の負担が大きい	46%	48%	43%	45%	38%	44%	43%
分団内の士気・規律・団結力が向上する	41%	50%	37%	40%	32%	41%	29%
大会に向けた訓練にやりがいを感じている	22%	20%	22%	21%	21%	20%	27%
実戦的でない	21%	19%	20%	19%	23%	18%	28%
現状のままでよい	10%	13%	9%	8%	20%	10%	10%
操法が難しい	4%	2%	4%	3%	5%	11%	11%
その他	2%	2%	2%	1%	7%	2%	3%

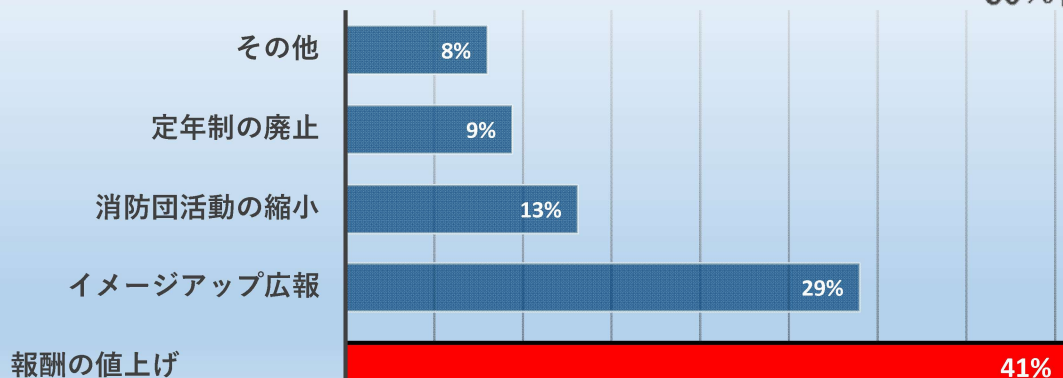
Q 20 消防団活動（災害活動・団行事・訓練・住民指導・警戒等）において、消防団活動や消防団募集活動をアピールする広報活動は何か

30%回答



Q 21 消防団の人員確保策として効果的なもの

50%回答



Q22 分団倉庫で、改善して欲しい事	22%回答
・収納スペース拡大	60%
・トイレの増設	14%
・エアコン入替え	13%
・電気、水道、ガスの配備	4%
・シャワー設置	3%
・インターネット環境	2%
・その他	2%

その他、自由意見	11%回答
災害活動・訓練関係	
<ul style="list-style-type: none"> ・有意義に消防団活動しています。（20代・女性・団員） ・消防職員のように特別な訓練を受けていないから、緊急車両の操縦訓練を定期的に行う必要がある。（50代・男性・副団長以上） ・緊急情報伝達システム、出火報は早く入るが誤報が多い。（60以上・男性・分団長） ・訓練の集合時間が早すぎる。（40代・男性・団員） ・東日本大震災で全国の数多くの消防団員が犠牲になったことを忘れずに災害活動してほしい。（60以上・男性・副団長） ・消防団活動の負担が多すぎる。（40代・男性・部長） ・人を育てられる指導者への教育訓練が必要である。（50代・男性・部長） 	
操法大会（行事）関係	
<ul style="list-style-type: none"> ・操法大会訓練回数多い。（60以上・女性・班長） ・各活動での待機時間が長い。民間では考えられない非効率さである。（50代・男性・団員） ・操法大会の練習場所の確保が困難で、何回も地域住民に説明、お願いに行くのが大変なので確保をお願いしたい。（50代・男性・部長） ・操法大会が負担。実践的ではなくやる意味があるのでしょうか。（50代・男性・班長） 	
人事関係（入団・退団）	
<ul style="list-style-type: none"> ・未活動団員は退団したほうがいい。（60以上・女性・班長） ・分団人事について→好き嫌いで決めないでほしい。年数ではなく活動参加数、操法大会参加の有無等で決めてほしい。（60以上・女性・部長） ・口うるさいOB、先輩が老害みたいだから、若い人がやりたくなる。退団してほしい。（50代・男性・班長） ・幽霊団員（未活動団員）の退団を促す。（60以上・男性・副団長以上） ・身体障害のある方の活動の可否を明確にしてほしい。入団を考えている人や相談されたときに使用したい。（50代・男性・部長） ・外国人の入団が必要である。（60以上・男性・部長） ・若い力がほしい。（60以上・男性・団員） ・人員確保のため、団行事通達の見直し（60以上・男性・分団長） ・活動にまったく出ない消防団員について、消防団長通達等で退団を促してもらいたい。（60代以上・男性・分団長） ・若い人が入団せず高齢化が進んでいる。公務員や外国人（在日二世等）に積極的に入団してもらうべきである。（60以上・男性・分団長） 	

広報・団員募集関係

- ・ 広報活動が重要である。（５０代・女性・部長）
- ・ 消防団の知名度はあるが、ボランティア活動となるとやる人は少ない。仕事があるときは面倒でやりたくないと感じる人が多いと思う。広報活動を行い人員の確保が課題である。（５０代・男性・部長）
- ・ 若い人へのアピールが必要である。（５０代・男性・部長）
- ・ 企業団員を増やす。（６０以上・男性・副分団長）
- ・ 世間から消防団は大変そうで閉鎖的だと思われる。クリーンで開放的な印象をつくる広報活動が必要である。（５０代・男性・班長）
- ・ 団員増員にため都知事の宣伝が必要である。（５０代・男性・団員）
- ・ 江戸川区総合防災訓練は日曜日に実施することで、広報に繋がり、一般の方も防災知識が高まる。（５０代・男性・分団長）

講習・研修関係

- ・ 防災訓練を英語のできるくらいの英会話研修があるとよい。（６０以上・男性・部長）
- ・ サービス業のため基本土日の団活動が厳しいため、救命講習等の研修を平日にも設けてほしい。（４０代・男性・団員）
- ・ 江戸川区は水災害リスクがあるので、研修制度で船舶免許取得を優先して取得できるようにしてほしい。（５０代・男性・団員）

施設、装備（給貸与品含む）関係

- ・ 夏場の活動服が暑い。（４０代・女性・団員）
- ・ 女性のパンプス→革靴（怪我防止のため）（６０以上・女性・部長）
- ・ 活動服等の配布の迅速さが必要である。（６０以上・男性・副分団長）
- ・ 消防二輪車の設置（５０代・男性・班長）
- ・ 積載車がある場合は手引きポンプは置場の確保が大変なので必要なし。その分を他の経費に回してもらいたい。（６０以上・男性・分団長）
- ・ 保育施設の設置（２０代・女性・団員）
- ・ 制服等が多い。イベント毎のＴシャツも不要である。（４０代・女性・班長）
- ・ 江戸川区は川に挟まれている。気象状況において、今までに経験したことのないような大雨や水害の可能性がある。腰あたりまで水の入らない水害用作業服等を用意してほしい。（５０代・男性・分団長）
- ・ 公園に分団庫を設置することで防災意識が向上する。（５０代・男性・副団長以上）

その他

- ・たまにしか活動できない人に対して温かい態度で接したい。（５０代・女性・団員）
- ・署と分団との連絡の正確さが必要である。（４０代・男性・班長）
- ・アンケートの電子化（２０代・女性・団員）
- ・現場のままではいずれ消防団はなくなる。紙でのアンケート調査は時代遅れ。負担も大きく早急な改善が必要である。（５０代・男性・団員）
- ・ＯＢの目が厳しいため、趣味との両立が不安である。（６０以上・男性・分団長）
- ・高齢の一人暮らしが増えているので、見回りが必要である。（５０代・男性・団員）
- ・できるだけ自分のできることをやりながら続けていきたい。女性が活躍できる場を増やしてもらいたい。（５０代・女性・班長）
- ・家族を消防車に乗せる機会を増やしてほしい。（３０代・男性・団員）
- ・４０代半ばで入団したがもっと早く入団すればよかった。（５０代・男性・班長）
- ・分団長の負担が大きすぎる。時間も多く取られるしお金のことも自分で負担しているし、まさにボランティアです。（５０代・男性・副分団長）
- ・新しい団員との考え方にギャップを感じるが多くなってきた。組織として、現代風に変化する必要がある。（５０代・男性・班長）
- ・都、区、署との連携する。（５０代・男性・団員）

江戸川区消防団の地域特性

1 江戸川区の特徴

江戸川区の特性として、荒川、江戸川、新中川など中小河川の流域において、区内の約七割が海拔ゼロメートルの低所地域を有するなかで、市街地、地下施設等の浸水危険や中高層建物の増加に加え、外国人の居住者も年々増加するなど、地域特性を踏まえた大規模災害（震災・水災）に対して、対策強化を図る必要があるとともに、令和4年に発表され東京都の地震被害想定結果では、人的被害が多く発生する予想となっており、江戸川区をはじめ、関係機関では、大規模災害に対する強化が図られた。

2 消防団の充足率

特別区全体と比較すると若干下回る状況であるが、第七消防方面内でみると、江戸川区は、江東区に次ぐ充足率であり、同方面内の平均充足率を若干ではあるが上回る状況となっている。

令和6年9月1日現在、江戸川、葛西、小岩の三消防団の員数は、26個分団、計910名である。（別添え2—1「江戸川区消防団の現況」参照）

3 消防団の火災出場件数

令和5年中の江戸川区内の建物火災件数は118件、消防団が出場した件数は、100件であり、特別区内全体での出場率は第1位である。（別添え2—1「江戸川区消防団の現況」参照）

4 消防団の予防警戒（防災・救急訓練指導、区・町会行事の警戒）

令和5年中は、各地で発生した豪雨災害、地震災害に対する防災意識の高まりがあり、江戸川区内の防災訓練は、595件 66,866名が参加しており、消防団員が初期消火・応急救護訓練等の指導にあたった。

また、区・町会主催の行事（まつり・運動会・花火大会等）では、コロナ禍に強いられた行動制限の反動で多くの区民が参加し、消防団員も警戒員として従事した。

防災救急指導と警戒活動を合わせて、年間1122件、延べ9910名の団員が従事しており、特別区の出向率も上位クラスである。（別添え2—1「江戸川区消防団の現況」参照）

5 町会配置のポンプ車の活用

町会から配置されたポンプ車等は、37台（江戸川17台・葛西10台・小岩10台）保有しており、特別区内においては非常に珍しく、各町会員の防災に対する意識の高さと消防団が町会から信頼を寄せられ、信頼関係を築いていることが伺える。（別添え2—2「江戸川区消防団ポンプ積載車一覧」参照）

6 江戸川区貸与の救命ボート活用

区内は、荒川、江戸川、新中川などの中小河川と東京湾に囲まれており、区内の約七割が海拔ゼロメートルの低所地域を有していることから、江戸川区から、江戸川区内の3消防団（江戸川10艇、葛西8艇、小岩8艇の計26艇）に対して救命ボート一式が貸与され、各消防団は、水害事象に備え消防署と連携した訓練を毎年実施している。

江戸川区内消防団の現況

令和6年9月1日現在

1 江戸川区内消防団の現勢

		江戸川消防団	葛西消防団	小岩消防団	東京23区消防団
団 長 名		渡邊 登	関口 政男	佐栖 誠	
分 団 数		10個分団	8個分団	8個分団	
可 搬 ポ ン プ 数		32台	15台	31台	
定 員 数		350名	300名	450名	
現 員 数		273名	227名	410名	16,000名
充 足 率		78.0%	75.7%	91.1%	13,578名
区内平均充足率		81.6%			84.9%
内 訳	男 性	241名(88%)	186名(81%)	342名(83%)	10,512名(77%)
	10・20代	23名	29名	19名	
	30代	21名	22名	37名	
	40代	48名	32名	59名	
	50代	90名	47名	136名	
	60以上	59名	56名	91名	
	女 性	32名(12%)	41名(19%)	68名(17%)	3,066名(23%)
	10・20代	5名	5名	16名	
	30代	0名	4名	5名	
	40代	6名	4名	14名	
	50代	15名	11名	15名	
	60以上	6名	17名	18名	
平 均 年 齢		50.3歳	49.1歳	51.1歳	50.4歳
消防団協力事業所		3事業所	3事業所	5事業所	353事業所
事業所団員数		2名	23名	21名	1,116名
学 生 団 員		14名	28名	18名	957名

2 令和5年中の消防団活動状況

区 分		団別等	江戸川区内			
			江戸川消防団	葛西消防団	小岩消防団	
火 災 出 場	件 数		100件	19件	58件	23件
	人 員		1,049名	127名	812名	110名
予 防 警 戒	件 数		1,122件	294件	380件	448件
	人 員		9,910名	2,730名	3,222名	3,958名
教 育 訓 練	件 数		1,121件	455件	252件	414件
	人 員		12,695名	5,130名	3,495名	4,070名
機 械 整 備	件 数		406件	116件	174件	116件
	人 員		2,154名	836名	1,077名	241名
そ の 他 災 害 (水災等)	件 数		5件	0件	3件	2件
	人 員		30名	0名	17名	13名

数値は速報値です。

江戸川区内消防団 ポンプ積載車一覧

江戸川消防団 町会配置 17 台 庁配置 4 台		葛西消防団 町会配置 10 台 庁配置 3 台		小岩消防団 町会配置 10 台 庁配置 4 台	
分 団	所 有	分 団	所 有	分 団	所 有
1	東京消防庁	1 - 1	東京消防庁	1	東京消防庁
2	東京消防庁	1 - 2	町会配置	2	東京消防庁
3 - 1	町会配置	2 - 1		3	東京消防庁
3 - 2		2 - 2		4	東京消防庁
3 - 3		3 - 1		5 - 1	町会配置
4 - 1		3 - 2		5 - 2	
4 - 2		4 - 1		5 - 3	
4 - 3		4 - 2		6 - 1	
5 - 1		5	東京消防庁	6 - 2	
5 - 2		6	東京消防庁	6 - 3	
5 - 3		7	町会配置	7 - 1	
6 - 1		8 - 1		7 - 2	
6 - 2		8 - 2		8 - 1	
7 - 1				8 - 2	
7 - 2					
7 - 3					
8 - 1					
8 - 2					
8 - 3					
9	東京消防庁				
10	東京消防庁				

【東京消防庁等が主催するもの】

研修及び講習名		対象者	内 容 等	募集人員
幹部研修	初級幹部科研修	班長	初級幹部として必要な指揮要領等について習得する。	1名
	中級幹部研修	分団長、副分団長、部長	中級幹部として必要な知識、部下指導及び指揮能力の向上を図る。	1名
	上級幹部研修	団長、副団長	上級幹部として必要な見識、管理監督及び統括指揮について習得する。	1名
	指揮幹部科研修	分団長、副分団長、部長	大規模災害時における指揮者としての職責を自覚し、指揮能力向上を図る。	1名
	幹部候補中央特別研修	40歳以下、団歴3年以上	消防団の幹部候補として活躍が期待される若い消防団員に対し、男女別に特別研修を実施し、将来の消防団幹部を育成する。	1名
資格取得講習	第三級陸上特殊無線技士養成課程	努めて部長以上	電波法の規定による無線従事者を養成するため、公益財団法人日本無線協会が実施する講習を受講し、資格を取得する。	3名
	二級小型船舶操縦士講習	部長以下	二級小型船舶操縦士に必要な航海上の知識及び操船技術を習得する。	1名
	可搬消防ポンプ等整備資格者特別講習	3年以上の実務経験を有する者	可搬消防ポンプ等の点検整備について、必要な知識及び技術を有する者を養成するための講習を受講し、資格を取得する。	1名
技能取得研修	警防科研修	部長以下	消火、救助及び震災時等における消防活動を行う際に必要な知識・技術、消防署隊との連携要領を習得する。	1名
	機関科研修	班長以下、免許取得2年	可搬ポンプ積載車を運行するための緊急走行、機関運用等に必要な知識、ポンプ運用の習得を図る。	1名
	女性消防団員研修	分団長以下	女性消防団員の活性化及び活動能力の向上を図る。	1名

【特別区消防団長会が主催するもの】

研修及び講習名	対象者	内 容 等	
消防団員教養講座	指導的立場にある者	外部講師による危険予知訓練等の教養講座	1名
健康セミナー	指導的立場にある者	外部講師による公務災害防止に向けた運動実技の習得を行う。	1名
ハラスメント防止講習	指導的立場にある者	外部の専門講師によるハラスメント防止に向けた講習会	1名
英会話技能講習	指導的立場にある者	外国人と接する機会の増加も予想されることから、英会話能力向上を図るための講習	1名
学生消防団員セミナー	学生団員	次世代の担い手の育成とコミュニティの構築による消防団組織の活性化を目的とした講習	1名

手話技能講習	指導的立場にある者	災害時における聴覚等障害者への対応、平常時における手話を活用した救命講習や防災訓練指導の実施等、聴覚等障害者への対応力を向上させる講習	1名
女性消防団員セミナー	女性団員	都内で活躍する女性消防団員同士の交流及び情報交換の場を提供することで女性消防団員の定着を図る。	1名

【消防団が主催し、消防署が支援するもの】

教育訓練名		対象者	内 容 等
基礎教養	分団長教養	分団長	消防団幹部としての指揮能力向上に対する教養
	副分団長教養	副分団長	各種災害活動能力向上に対する教養
	新入団員教養	新入団員	消防団員ハンドブック等を活用し、消防団員としての基礎的知識及び技術の習得
教育訓練推進者教養		教育訓練推進者	教育訓練推進に対する知識及び技術の習得
実戦的訓練	署隊との連携訓練	全団員	年度において2回程度、実戦的な訓練を行う。
	隣接消防団との合同訓練	全団員	隣接消防団と合同で総合訓練を行う。
震災訓練	総合震災消防訓練	全団員	参集、情報収集、団本部運営及び実動訓練を通し、震災時の活動能力向上を図る。
	震災図上訓練	全団員	署隊本部と団本部が連携し図上訓練を行い、震災時の活動能力向上を図る。
水災訓練	区総合水防訓練	全団員	署隊と連携して水防工法等の訓練を行い、水災時の活動能力向上を図る。
	水災図上訓練	全団員	署隊本部と団本部が連携し図上訓練を行い、水災時の活動能力向上を図る
上級救命講習		全団員	普通救命講習の内容に加え、小児・乳児に対する心肺蘇生包帯法を習得する。
上級救命再講習		全団員	上級救命講習を修了し、3年を経過した者が改めて受講する。
応急手当普及員講習		上級救命講習者	団普及員になるために必要な資格講習。主として事業所、防災組織及び地域において、当該事業所等の者に対する普通救命講習の指導者に従事する。
応急手当指導員講習		応急手当普及員	東京消防庁が行う普及業務に関する講習の指導に従事する。応急手当指導員講習を修了すると上級救命講習の指導者に従事することができる。
フォローアップ講習		応急手当指導員	応急手当指導員講習の認定証を有する消防団員の技術向上を図る。

特別区消防団の装備資器材について

救助・救急資器材

種別	資器材	配置	使用目的	写真
救助 資器材	チェーンソー	各ポンプ	震災時に木材等を 切断	
	切断防止用保護衣	各ポンプ	チェーンソー使用時 に装着	
	携帯型油圧救助器具	各 分 団	倒壊建物からの救助 や車両ドア開放等に 使用	
	万能ハンマー (ペンキ、ストライカー)	各ポンプ	機械が使えない所で の破壊活動に使用	
	簡易救助資器材	各ポンプ	パール、大ハンマー、 鉄線鋏、鋸、ロープ等	
	フロートロープ	各 分 団	水面に浮き冠水時の 避難誘導等に使用	
救急 資器材	救急カバン	各 分 団	三角巾、包帯 ゴム手袋等	
	担架	各 分 団	折りたたみ可能な 担架	
	A E D	各 分 団	負傷者が発生した際 の応急救護活動に使用	
	感染防止衣	各 分 団	応急救護活動時の 感染防止	

特別区消防団の装備資器材について

照明・保護器具関係

種別	資器材	配置	使用目的	写真
照明 資器材	投光器	各ポンプ	夜間の災害、警戒等で 使用(投光器、発電機、 三脚、コード)	
	電光表示器	各 分 団	夜間の災害、訓練等 で周囲を均一に照ら すバルーン型の投光 器、発電機付き	
	強力ライト	各 分 団	光の直進性が高い 懐中電灯	
	ヘッドライト	各 団 員	保安帽、防火帽に取り 付けて夜間の活動に おいて、視線方向を照 らすライト	
保護 資器材	防塵メガネ	各 団 員	救助活動や応急救護 活動や各種訓練時に おける目の保護	
	防塵マスク	各 団 員	救助活動等における 粉塵等の吸込みを防 止	
	救命胴衣	各 団 員	水防活動時等におけ る安全確保	
	スノースパイク	各 団 員	降雪時の活動時に、長 靴、活動作業靴に取付 ける滑り止め	

特別区消防団の装備資器材について

情報・伝達器具関係

種別	配置	使用目的	写真
M C A 無線機	分団長以上 消火班	特別区消防団員専用無線通信機で、 消防団間のみの通信に使用する	
携帯無線機	分団長以上	同一の管轄である消防署隊と同じ 署活波が入る 4 0 0 H z 携帯無線 機	
受令機	分団長以上	東京消防庁警防本部（総合指令室） からの災害情報を受信する	
トランシーバー	各分団に 3 機	災害活動や警戒活動における情報 伝達手段として使用	
モバイル機器 （タブレット）	本団、各分団	災害時の情報収集や情報共有、平常 時の訓練指導、オンライン会議、オ ンライン講習等に使用	

特別区消防団の装備資器材について

その他の資器材関係

資器材	配置	使用目的	写真
非常用発電機	各 分 団	震災等で停電時に分団本部に電気を供給	
フローティングストレーナー	各 分 団	可搬ポンプの吸管に取付け、震災時の河川等の自然水利からの給水や水災時の浸水区域での排水活動に使用	
リヤカー	各 分 団	資器材の搬送等に使用	
訓練用 救急資器材	各 分 団	応急救護訓練や都民指導に使用	  

ガンタイプノズルの概要

1 概要

ガンタイプノズルは、放水流量を 4 段階から選択でき、状況に応じて流量を切り替えることができる放水器具である。開閉ハンドルにより、こまめな開閉操作ができ、流量、放水形 状を固定したまま、放水の開始、停止ができる。

2 諸元性能

項目	数値等			
流量切替ダイヤル値	12 5	2 4 0	3 4 5	4 5 0
流量 (L/min)実測値	14 0	2 6 0	3 7 0	4 6 0
有効射程(m)実測値	1 4	1 5	1 8	1 8
放水反動力(N)計算値	7 3	13 5	19 2	2 3 9

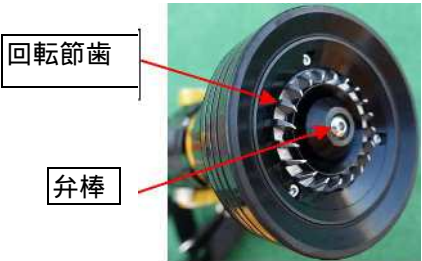


バンド
開閉バンドル
グリップ



噴霧角度調整ヘッド

流量切替ダイヤル



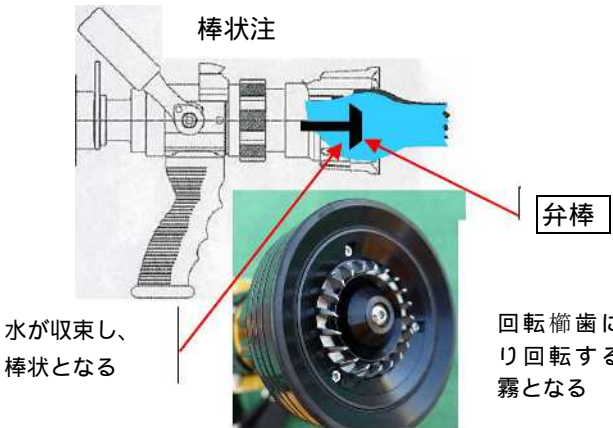
回転節歯

弁棒

定流量型可変噴霧ノズルで、棒状及び噴霧の切換えを行っても流量は一定である。

棒状注水は、スムーズノズルと違い、弁棒(放出される水の形状を調整する棒)の外周 部の隙間から放出された水が収束し、棒状となる。

噴霧注水は、弁棒が前方に移動することによって放出された水が広がり、さらに回転櫛 歯に当たり、回転櫛歯が勢いよく回転することできめ細かな噴霧を形成する。



水が収束し、棒状となる

弁棒

回転櫛歯に水があたり回転することで噴霧となる



パーフェクトノズルの概要

1 概要

放水ノズルは、管そうに取り付けて使用するもので、放水の目的に応じて使い分けができるように、放水ノズルごとに異なる形状、構造となっている。

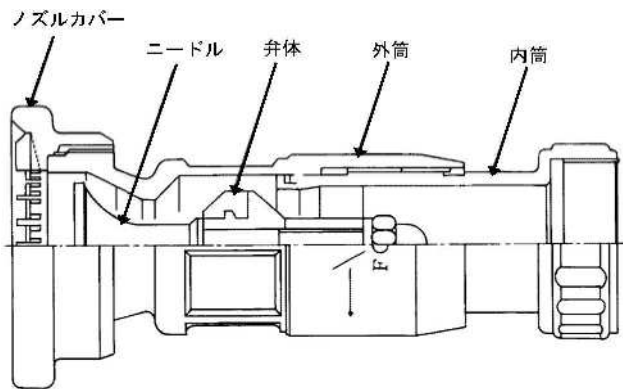
2 緒元・性能

項目	性能
ノズル種別	パーフェクトノズル
寸法(mm)	200
(全長×最大外径)	196× 96
重量(kg)	約 0.9
ノズル口径(mm)	20 又は 23
材質	アルミニウム合金
放水形状	直状・噴霧放水 

3 パーフェクトノズル構造

構造は、図のとおりである。開閉角度を変えても放水量は一定である等の特徴がある。

また、放水の停止が内蔵された合成ゴム製の弁体によって噴霧側でも行うことができ、反動力が減少した時に閉止されるので保持しやすい。



消火用ホースの比較

1 概要

消火用ホース（以下「ホース」という。）は、ポンプで加圧した水を送水するためのもので、ポリエステル縦糸と横糸で交織されたジャケットの内側に、合成ゴム又は合成樹脂を内張りしたものである。

50mmホースについては、ジャケット両耳部に蓄光ラインを施したものを採用している。また、50臭ホースについては、平成30年度から「方向標示付きジャケット」になっており、退路方向を示す標示が施されている。

結合金具の方式は、50臭ホース・呼称65ホースねじ式がある。

2 諸元・性能

項 目		緒元・性能	
呼 称		50臭ホース	65臭ホース
種 別		樹脂内張りホース	
内径（臭）		51～54	63.5～66.5
ジャケット		シングル	
		ポリエステル	
蓄光性能		有	無
使用圧力（MPa）		1.6	
摩擦損失（MPa）		0.09	0.03
長さ（m）		20	
総重量（kg） （結合金具を含む）		6.0～6.5	8.3～9.0
結合金具	方 式	ネジ式	差込み式
	材 質	アルミニウム合金	
	取付方法	エキスパンドリング式	

電動ホースカーの概要

1 概要

動力ホースカーは、火災現場において早期にホースを延長し、火災防御体制の迅速化及び隊員の労力の軽減を図ることを目的とするものである。

2 緒元・性能

項目	諸元・性能
	標準型動力ホースカー
モーター型式	直流永久磁石式電動機
フレーム型式	スペーススライドフレーム
シフト方式	手動切替式(2 段変速)〔高速 - N - 低速〕
定格出力(kW)	1
全長×全幅×全高 伸長時	1,639×1,120×1,090
最小回転半径(m)	2.3
最高速度(km/h)	高速 10.0(低速 5.0)
最大登坂能力(度)	10(最大積載時)以上
連続走行距離(km)	4 (最大積載時)以上
制動距離(m)	3 以内
車体質量(kg)	186
最大積載質量(kg)	150
乗車定員(名)	1

3 構造

動力ホースカーは図のとおり、パルス変調制御方式の省エネルギー型の 1 kW モーターを動力源とし、動力伝達装置を介して後輪を駆動して走行するものである。また、ハンドルに取り付けられたアクセルレバーの操作により、最高速度 10km/h まで自由に速度を変えられるとともに、登坂能力 10 度以上の性能を有する。

電動ホースカー



手引きポンプ

